

戯作者と艶本——『春窓秘辞』をめぐる

板 坂 則 子

専修大学文学部教授

艶本『春窓秘辞』

『春窓秘辞』は折帖仕立ての刊本で大本一冊。各面に色変わり、模様変わりの上質紙を用いて、文芸に関わる著名人による一年十二ヶ月の景物に因んだ戯文を載せた豪華本である。第一面には、濃紺地に蜀山人による漢文が、自筆板下の文字を石摺風の白抜きにして摺られている。強い色調の漢文序が最初に置かれることで、帖本全体が高尚な雰囲気にも包まれる効果を挙げている。序文を、判読しやすいように一字分の空白を適宜、挿入して記す（次の漢文翻刻も同様に処す）。

古代中国の春宵秘戯図や土佐派による春画絵巻から艶本は多く蔵せられているが、それらを収めた書筐は蔵の中に置くとは防火の効果があるといわれており、猥雑として排斥すべきものではない。樵山子が来て春画に文を添えるよう請われたと、本書成立の由来が記されている。この序文によると本書は「樵山子」が用意した春画に因む画賛を集めたものとなるが、その春画は出された形跡がない。というよりも凝りに凝った装訂からは、本書に載せた画賛こそが目的であることを示しており、春画抜き春画帖という遊びの趣向が伺える。艶本は末期の読和を除いては、春画が中心の書物である。しかし本書では描かれた月毎の景物を執筆者各自が想定し、それに合わせた性的な狂文を寄せたのである。

蜀山人こと大田南畝は十九歳で狂詩文集『寢惚先生文集』（明和四年1767）を刊行して一躍文壇の人気者となった早熟の天才である。彼はそれまでの上方中心の文化を一掃して新興都市江戸にふさわしい斬新で歓楽的かつ直裁的な言語遊戯の世界を創成し、それ以後の江戸文芸を導く天明（1781〜89）狂歌の流行を生み出した。その活躍は狂詩・狂歌に留まらず、遊里を舞台とすることで江戸っ子の洒落た感覚を追求した洒落本や、画像と本文を同一面に置くことで幅広いリテラシーの江戸人に受け入れられた草双紙（黄表紙）の作もあり、多くの江戸文芸のジャンル形成期に大きな働きをなした。その後、松平定信による寛政の改革による享乐的な風潮への粛正によって戯作を離れ、徳川幕府を支える御家人の能吏としての生活を歩む。十数年後にふたたび戯作の世界に近づくが、それは好事としての側面が強く、紀行や随筆、漢詩漢文など硬軟和漢の文芸に自在にその才を見せ、江戸っ子にとって最も持て囃され敬仰された文人である。「蜀山人」の号は南畝五十三歳で大坂銅座詰に赴いた折に「銅」

の異名である「蜀山居士」から取って使い出したもので、南畝の号として最も世に知られていた。^(注1) 本書の刊行は後述するように、収められた狂文中の記載からほぼ文化十年1813と推定されている。この年、蜀山人こと南畝六十五歳。『春窓秘辞』は文壇の重鎮である蜀山人の呼び掛けに応え、江戸文芸のさまざまなジャンルを代表する人物が文を寄せた豪華本となったのである。

本書は多くの文人が関わった異質の秘本としてその存在は知られていたが、稀覯本である。中野三敏氏旧蔵本^(注2)については、中野氏がいまだ学生の頃、初めて中村幸彦氏を九州大学に訪うた日に近くの古本屋で見出し、これを中村氏に見せたことから「一人前扱いしていただけた」と、その思い出が『和本の海へ』に記されている。^(注3) 中野氏旧蔵本の画像は国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」で公開されている。^(注4) そして専修大学図書館にも二〇一〇年に購入され、秋の「江戸の文華」展^(注5)に出品された『春窓秘辞』がある。中野氏旧蔵本と専修大学図書館本（以下、「専大本」と記す）を比較すると、中野氏本の最尾の裏見返しに繋がる面に載る跋文が専大本には見られない。その跋文は、

十二月毎有図画彩 精密未得其工 因先刻其文後其図云

淇澳堂主人

十二の月毎に描かれた画図があるが精密なものなのでまだ出来上がらず、先に文を出し、後から画図を刻すというもので、序文に記された成立事情を補うものであるが、「淇澳堂主人」は序文に見る「樵山子」と共に正体不明である。『春窓秘辞』は内容と装訂の凝り方から、公刊を目指したのではなく「淇澳堂」の知友への配り本であっ

たと推定されている。その後、それほど数は多くなかったのであろうが書肆(注6)から売り出された際に、「春画は後から刊行」という事実⁶に反する跋文は取り去られたと推測される。中野本は替表紙であるが本文部分をすべて備えた当初の配り本であり、専大本はその後におそらく少部数売り出された版である。

以下、専大本によって筆を進める。

まず略書誌を記す。

所蔵：専修大学図書館

大きさ・冊数：大本一冊（二七、〇cm×一八、二cm）

表紙：若草色無地、斜め格子中に波模様が空摺。中央部に貼り題簽（二〇、一cm×三、三cm）、子持ち枠、枠線と書名は薄褐色で摺られている。書名表記「春窗秘辞」（図1）。

装訂：折帖、見返し一面、序文一面（図2）、本文部分十四面の計十六面。各面に色変わり・模様変わり料紙を用いているが、各面は見開き一面を摺り出して両端を糊付けしている。見返し・白地に槍霞が入る。彩色は色褪せの為に不明（現在は焦茶色）ではあるが、銀摺か。
作者と内容については、後述。

次いで本書の翻刻・解説稿について記すと、浜田桐舎

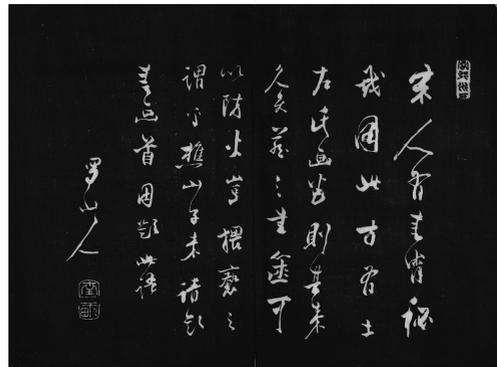


(図1) 「表紙」

（義一郎）氏による簡単な注釈付きの翻刻が一九五二年二月から五三年七月に掛けて六回に分けて『近世庶民文化』に掲載され、並行して岡田甫氏による翻刻書が一九五三年に出され、さらに浜田義一郎氏による丁寧な解説「春窓秘辞」（一九六七年）が出ている。岡田氏による翻刻が載る『真情春雨衣』は特漉和紙を用いたフランス装に近い特殊な装訂（紅鶴版）の「予約会員にのみ頒布」された高価な書で、伏せ字や読み替え、省略箇所を記した「正誤表」が付けられている。浜田氏による翻刻では「会員以外に頒布せず」の「研究會の研究報告會報」であることから伏せ字などは見られないが、稀少本である。浜田氏と岡田氏の資料を参考に、『春窓秘辞』の中に入っていく。

十二ヶ月の戯文

月毎の景物を念頭に作られた戯文は、それぞれが美しい色摺や模様入の料紙に、各作者の自筆板下によって刻されている。各月の筆者と戯文について記す。まず記載されている号と通称、文化十年における年齢と、没年、江戸文芸との関わりを略記する。それぞれの戯文については、長さや料紙、内容を簡略に紹介しておく。さらに艶本作製の関わりを、林美一氏『江戸艶本大事典』、白倉敬彦氏『絵入春画艶本目録』、早川聞多氏の御教示によって補記しておく。



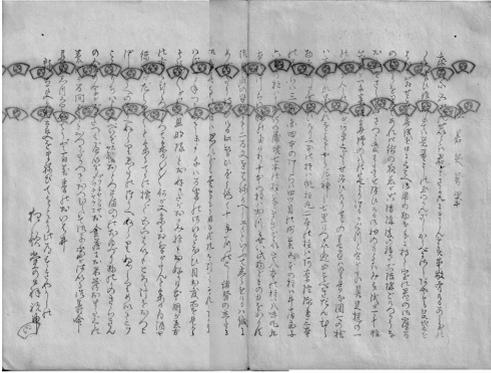
（図2）「序」（専修大学図書館蔵本）

正月 狂歌堂（鹿都部真顔）（図3）

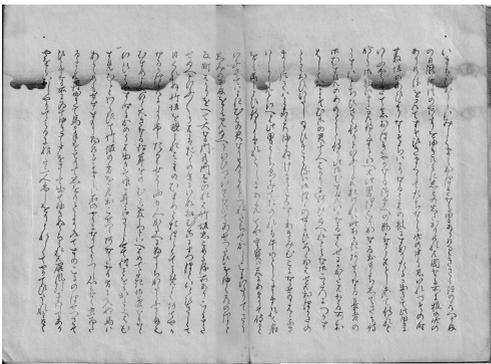
六十五歳、文政十二年1753没、享年七十七歳

南畝門下の狂歌師で化政期（1804～30）の狂歌界を宿屋飯盛と共に背負って立った。古典的で優雅な「俳諧歌」を提唱し、文化末頃には飯盛と對抗関係にはあるが人気を二分していた。狂名は鹿都部真顔。

正月は見開き一面を用い、料紙は「扇中に丸に三つ星紋」の狂歌堂の印を上部に二段に摺り込んである。二段の色は異なっており、現在の彩色は褪せて上部は焦げ茶、下部は銀鼠色であるが、元は上部金摺、下部銀摺であったかと思われる。



（図3）「正月」



（図4）「二月」

戯文は「徳若笑万歳」と題して、正月に各戸を巡ったためた「万歳」の詞章を用い、さまざま性的な事物を読み込んだ三河万歳の巧みなパロディとなっている。

狂歌堂(真顔)が関わった艶本はない。

二月 六樹園(宿屋飯盛・石川雅望)(図4)

六十一歳、天保元年1830没、享年七十八歳

南畝門下の狂歌師であるが、国学者としての名は石川雅望で、読本作者としても著名。軽妙で機知に溢れた読みぶりは真顔と対照的で、より広く人気を集めていた。狂名は宿屋飯盛。

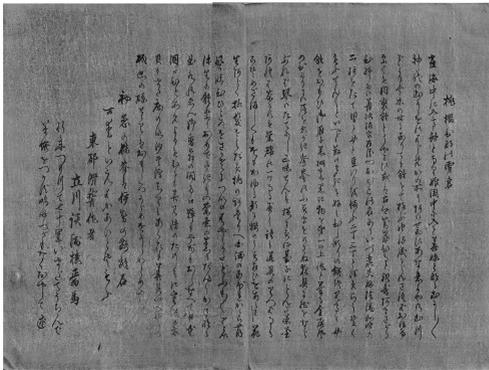
二月は見開き二面を用いた長文で、料紙は和文に合わせて藍の雲紙(上部のみ)。戯文は王子稲荷神社の二月初午に因み、妖狐の艶笑怪異譚が彼の特長を活かして擬古文で綴られている。

六樹園(飯盛)はさまざまなジャンルで活躍したが、艶本の制作は伝わらない。

三月 東都滑稽作者 立川談洲楼焉馬(烏亭焉馬)(図5)

七十一歳、文政五年没、享年八十歳

大工の頭領で「噺の会」を主催して江戸落語中興の祖とされ、俳諧や狂歌に親しみ、談義本や滑稽本、洒落本の作も残し、七代目市川団十郎



(図5) 「三月」

を熱烈に鼻唄して歌舞伎通史も書くなど、多岐に亘る活躍をした。

三月も見開き一面を用いるが、桃の節句に因んでやや赤みがかった桃色染めの料紙となっている。戯文は桃の節句に婚礼を挙げた男女の交わりを描くが、署名の後に「行年つもつて七十歳いまだてうちんで草餅をつかず嗚呼つがもなくおやして述」とある。

焉馬も、艶本には関わっていない。

四月 式亭三馬 (図6)

三十八歳、文政五年没、享年四十七歳

戯作者。草双紙の黄表紙から合巻への転換を決定づけた『雷太郎強悪物語』(文化三年)の作者であり、代表作となる滑稽本『浮世風呂』も既に出、『浮世床』もこの年に刊行されている。

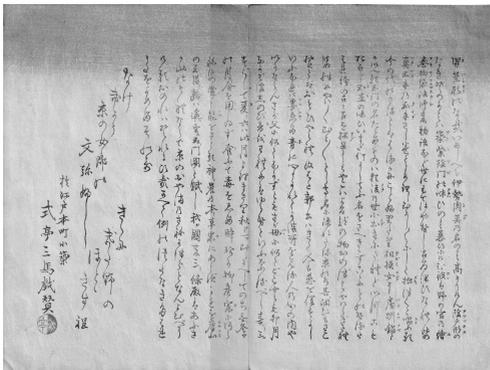
四月は見開き一面を用いて夏の訪れを告げる郭公を取り上げ、料紙は上部に空を思わせる水色が拭きぼかしで入っている。戯文は、みやこの遊女が郭公を聞く姿に添えたもの。

三馬は「好亭」の隠号を用いて、多くの艶本に手を染めている。

・『好色十二通笑・好色十二通気』色摺横小本一冊、寛政二年1790

頃、好亭(式亭三馬)序、勝川春潮画

・『会本都功密那倍』墨摺半紙本三冊、寛政十年頃、好亭序、喜多川歌



(図6) 「四月」

磨画

- ・『会本密須佳雅美』 墨摺半紙本三冊、寛政十年頃、すき亭序、作 葦山人（桜川慈悲成）作、歌川豊丸画
- ・『会本恋濃男娜卷』 色摺半紙本三冊、寛政十一年頃、好亭序、作 葦山人（桜川慈悲成）作、喜多川歌磨画
- ・『会本色形容』 色摺横半紙本一冊、寛政十二年、好亭山人序・作、喜多川歌磨画
- ・『会本夜密図婦美』 墨摺半紙本三冊、寛政十二年、好亭序・作、喜多川歌磨画
- ・『床の梅』 色摺中版組物十二枚、寛政十二年、好亭序、喜多川歌磨画
- ・『江戸紫』 色摺中錦組物十二枚、享和元年1801、好亭序、喜多川歌磨画
- ・『君が手枕』 色摺中版組物十二枚、享和二年頃、好亭序、喜多川歌磨画

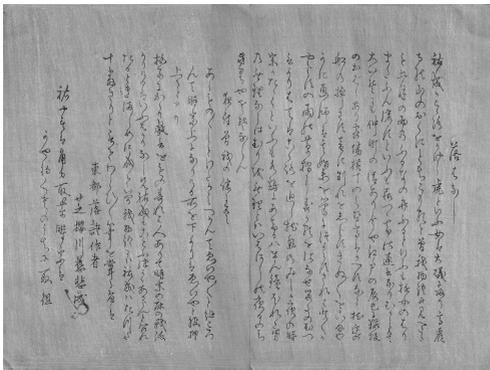
画

- ・『艶本婦美車』 墨摺半紙本三冊、享和二年頃、好亭主人作、喜多川月磨画
- ・『美多礼嘉見』 色摺半紙本三冊、文化十二年、強淫漢好亭主人（式亭三馬）序、溪斎英泉画

五月 東都落語作者 芝桜川慈悲成（桜川慈悲成）（図7）

五十三歳、没年未詳

黄表紙に作があるが、それよりも落語家として貴人相手の座敷咄に活躍し、焉馬と共に話芸の発展に寄与した。十二月を担当した桜川甚孝の



（図7）「五月」

師でもある。

五月も見開き一面で、「落はなし」と題して五月二十八日に行われた曾我兄弟の仇討を扱う。料紙は五月に合わせたか、くすんだ若竹色。戯文は祐成と虎、時宗と少将の兄弟二組の恋人との逢瀬を深川遊郭にうつして滑稽に読み替えたもの。

慈悲成は数本の艶本に「作茎」の隠号が見えるが、その中には四月の三馬と組んだ作もある。

・『会本密須佳雅美』墨摺半紙本三冊、寛政十年頃、すき亭（式亭三馬）序、作茎山人（桜川慈悲成）作、歌川豊丸画

・『会本恋濃男娜卷』色摺半紙本三冊、寛政十一年頃、好亭序、作茎山人作、喜多川歌麿画

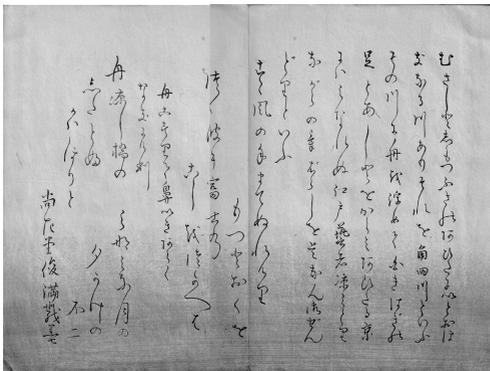
・『会本婦美好図理』墨摺半紙本三冊、寛政十一年、作茎作、歌川豊丸画

・『耶密図言葉』色摺横半紙本二冊、寛政十二年、作茎山人序・作、鳥高斎栄昌画

六月 尚左堂俊満（窪俊満）（図8）

五十七歳、文政三年没、享年六十四歳

狂歌、黄表紙、洒落本など活動は多様であるが、本業は浮世絵師。紅嫌いの上品な作風で知られる。



(図8) 「六月」

六月も見開き一面、料紙は隅田川の川遊びを思わせて薄縹色の拭きぼかしが下方に入る。戯文は角田川（原文表記）の舟に乗り、男と「白きはぎの足とあしをからみあ」う江戸芸者の姿をあつさりと描いている。俊満も、この時期の人気絵師としては珍しく、艶本の刊行作は見られない。

七月 山東京山（図9）

四十五歳、安政五年1858没、享年九十歳

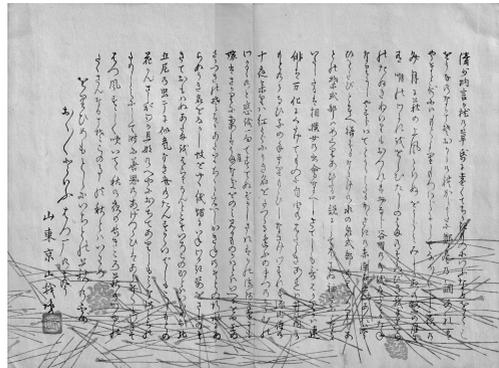
戯作者で合巻を数多く刊行。山東京伝の弟で、三十九歳で初作を出す。文化十年には人気作をいまだ持たない。活躍はこの後の文政から天保期で家庭的で穏やかな長編合巻が特徴。

七月も見開き一面を使い、料紙は下方に松葉と松毬を緑と朱の二色摺した華やかなもの。戯文は文末の狂歌に「をりひめ」が出るので七夕の図に添えるものと推されるが、清少納言に始まり赤染衛門、和泉式部、紫式部の和歌を引いて好色な相模女に続けている。性的描写を抑えつつ秋の長夜を描いたもの。

京山も、幕末期の人気戯作者ではあるが、艶本の作はない。

八月 飯台狂夫（曲亭馬琴）（図10）

四十七歳、嘉永元年1848没、享年八十二歳



（図9）「七月」

江戸後期を代表する戯作者で、読本を中心として合巻、黄表紙、随筆類など多くの著作を残すが、文化中期までは模索期で突出した人気作を持たなかった。しかし文化四〜八年の本格的な長編伝奇読本『椿説弓張月』の刊行によって自らの方途が固まり、京伝を凌ぐ戯作界の領袖へと歩んで行く。

八月も見開き一面、料紙は上部が青の拭きぼかしになっているが、文末の狂歌を活かして名月に雲の影がかかった様相を表しているか。戯文は「名月」に因んで月に因む中国の故事が並ぶ。他の多くが和文を志しているとは異なり、漢文調で書かれて馬琴らしさを出している。

馬琴が関わった艶本は一作のみ、それも上巻の附文までで、以下は他の戯作者に預けた中途半端な作である。

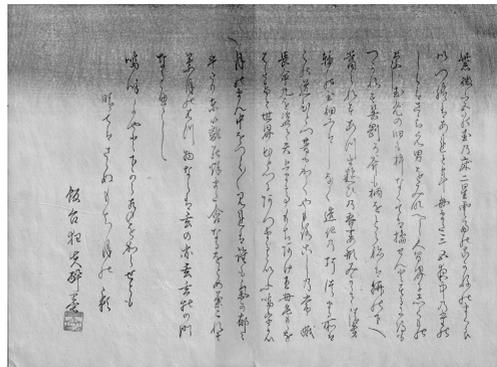
・『艶本多歌羅久良』色摺半紙本三巻、寛政十二年、曲取主人(曲亭馬琴)序、喜多川歌麿画

九月 三陀羅(三陀羅法師)(図11)

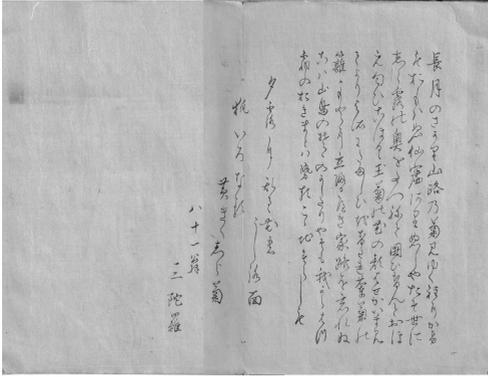
八十三歳、文化十一年没、享年八十四歳

狂歌師。寛政・文化期1799〜1818に活躍したが、狂歌堂や六樹園と張り合う程の人気はない。けれどもこの時期に於ける最長老の狂歌師である。

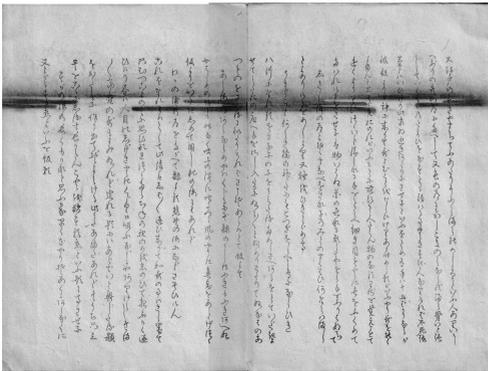
七月も見開き一面、料紙は文末の狂歌にある「狐色」に因み薄い赤茶色摺。戯文は「菊」に導かれて仙窟に行き



(図10) 「八月」



(図11) 「九月」



(図12) 「十月」

美女に出逢って帰るべき家居を忘れるという桃源郷ならぬ菊源郷をさらりと認めているが、文章は短くかなりの余白を持つ。署名には「八十一翁」とあり、それを信じると二年前の文章ということになる。

三陀羅法師にも、艶本の作はない。

十月 手がらのをか持（朋誠堂喜三二）（図12）

七十九歳、文化十年五月没、享年七十九歳

黄表紙の代表的作者・朋誠堂喜三二である。秋田藩の江戸留守居役という重職にあり、吉原を熟知し多くの当た

り作を持つが、寛政の改革以後は戯作を離れ狂歌や狂詩に親しんだ。手柄岡持は狂名である。

十月は見開き二面を使った長文で、料紙は上部に焦げ茶色の檜霞を拭きぼかして置くが、下方に緑青色が掛かる。上方は色が褪せているが銀摺を用いたかも知れない（現在は脱色して焦茶色）。戯文は「ふしまらのめしより」と「させ子」が妹背の語らいに至るまでの恋物語であるが、性的な描写をふんだんに盛り込んだ、いかにも艶本らしい文となっている。文末の署名には「文化のこゝとせみづのえさるの神無月 七十まり八つになれる」と添え書きされている。

手絡岡持（喜三二）は、種々の隠号を用いて艶本を出している。

- ・『けい閨花鳥嚮とりな』色摺大本一冊、天明三年1783頃、湿深すき成（朋誠堂喜三二）作、北尾重政画
 - ・『えほん会本色好乃人式しき』墨摺半紙本五冊、天明五年、ぼほのすきなり（朋誠堂喜三二）作、勝川春章画
 - ・『ちよだめ艶本千夜多女志』墨摺半紙本三冊 天明六年頃、陰戸はのすきなり序、勝川春潮画
 - ・『ねいろ艶本免の音色』墨摺半紙本三冊、安永八年1779頃、朋誠（朋誠堂喜三二）作、北尾重政画
- おそらく他にも、重政と組んだ作などを出しているのであろう。

十一月 山東京伝（図13）

五十三歳、文化十三年没、享年五十六歳

黄表紙・洒落本の傑作を出し、読本でも評判作を出し続けた当時第一の人気戯作者。そのきっかけとなったのは南畝が黄表紙評判記『岡目八目』で京伝の『御存商売物』（天明二年）を巻軸大上々としたことで、南畝との縁は深い。文化の中頃からは考証随筆に精魂を傾けており、文化十年成立の『骨董集』に南畝は序を寄せている。

十一月は見開き一面を用いているが、内容は芝居の「顔見世」で、料紙は抹茶色。戯文は歌舞伎の大宮人も世話場の庶民夫婦も恋に変わりなしと綴る。末尾の文から推すと、棧敷にはきらびやかな高位の遊女が並ぶ図柄を想定したのであろう。

京伝は浮世絵師としては北尾政演の名で活躍している。絵師として関わった艶本の数は多く、序や作で関わったものもある。石上阿希氏の「山東京伝艶本・春画目録稿」^(注13)には二十二作が紹介されている。その中から代表作をいくつか挙げておく。

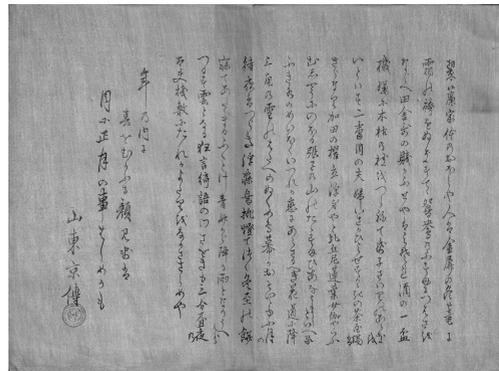
- ・『床喜草』^(注14) 墨摺小本一冊、天明四年、唐来参和序、北尾政演画
- ・『艶本枕言葉』墨摺半紙本三冊、天明五年、長命館主人(山東京伝)作・序、北尾政演作・画
- ・『縁本紫草紙』^(注15) 墨摺半紙本三冊、天明六年、「京橋の息子おやして述」(京伝)作、北尾政演画

十二月 桜川甚孝 (図14)

年齢・没年未詳

浜田氏や中山右尚氏^(注15)によると、幫間で桜川慈悲成の門下。

締めくくりの十二月も見開き一面で雪の夜の遊里を描く。料紙は上部に遊女の唇を思わせる紅の雲が、上部がごく薄い色目となる拭きぼかしで入る。戯文はあたりを包む雪の夜に閨中でしっとりとして過ごす年増と客を描く。短文



(図13) 「十一月」

で、迎える新年を寿ぐ筆遣いである。

甚孝の艶本については未詳。

蜀山人・大田南畝についても記しておく。

序 蜀山人

六十五歳、文政六年没、享年七十五歳

狂歌・狂詩、洒落本、漢詩文、隨筆、紀行などに多くの作を残し、江戸中後期の文壇を形成、牽引した。大田南畝、狂名は四方赤良、漢詩文には寢惚先生などの号を用いた。

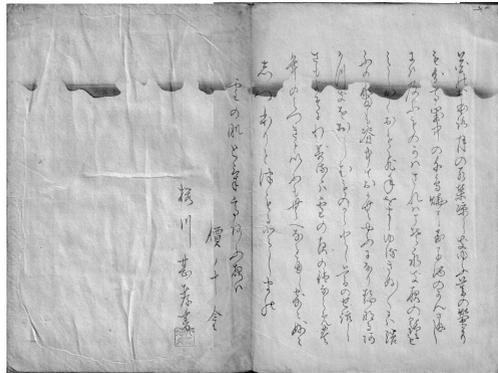
序文と料紙などについては前述。

蜀山人と艶本については、林氏が論考を出している。^(注16)「西早齋」の隠

号を最初に蜀山人のものとしたのは尾崎久弥氏で、林氏はそれを受けてこの謎に迫り、南畝の艶本と結論付けた。

- ・『御召名留美楚女』色摺中本三冊、文政四年頃、淫乱坊作・画
- ・『春野薄雪』色摺間判組物、文政五年、西早齋序・作、溪齋英泉画
- ・『娼婦嬌嬰』色摺半紙本二冊、文政五年頃、西早齋作・画
- ・『まく羅屏風』色摺中本三冊、文政五年頃、西早齋、溪齋英泉画

しかし小林ふみ子氏はこれらを調査し、口頭発表ではあるが、「西早齋」は南畝ではないと結論した。^(注17)なるほど



(図14) 「十二月」

架蔵の『娼婦嬌嬰』を見ると、溪斎英泉似ではあるが腕の劣る素人風の画に、英泉の『枕文庫』や当時の人口に膾炙した性に纏わる知識「黄素妙論」を用いた陳腐な作であり、蜀山人らしいひねりの全くないものである。小林氏の述べるように南畝作ではあるまい。しかしながら、知識人の先頭にいる塙保己一が『はつはな』（色摺絵巻一巻、喜多武清画、文化末〜文政二、三年）、黒澤翁丸が『貌姑射秘言』（はこやのひめごと）（大本二冊）をものしたように、晩年に艶本をものすることもあり得るか…と期待させるのも、蜀山人ならではのことではないだろうか。

『春窓秘辞』の刊年を先に文化十年としたが、これは三月・焉馬の「行年つもつて七十歳」、十月・岡持の「文化のこ、のとせみづのえさるの神無月」より、文化九年に文が集められ、翌十年に出されたかと推測したものである。『春窓秘辞』に文章を寄せた十三人は、狂歌、落語、浮世絵、戯作などさまざまなジャンルに関わる。種々の江戸文芸の大家ではあるが、大きく文人と戯作者とに分かれる。文人は自らの為に文章を成し、戯作者は読者の意向に合わせて筆を取る。とはいえ其処に厳然たる切り分けがあるわけでもなく、越境して種々の言語遊戯を楽しむ輩たちであるが、それでも年若なグループ、すなわち三馬や京山、馬琴、京伝は戯作者であり、慈悲成や喜三二もこのグループの先駆者として存在する。彼等はより後期の爛熟期戯作者とは異なり、知識人である文人たちと共に行動し、幅広い知のネットワークを楽しんでいた。『春窓秘辞』に関わった者すべてに共通する技は狂歌である。狂歌師の真顔や飯盛、三陀羅法師はもちろんであるが、戯作者も作品の序文や口絵、そして揮毫などには狂歌を筆にすることが多い。天明狂歌の熱狂的な流行は何十年にも亘ってその影響を持続し、江戸の流行に敏感な輩はすべからず狂歌に親しんでいた。たとえば式亭三馬編『狂歌鱧』（二編三冊、初編一冊は享和三年、後編二冊は文化三年刊）の初編には、大勢の狂歌判者の他に「戯作者」として談洲楼焉馬、芝楽亭慈悲成、曲亭馬琴、山東庵京伝、式

亭三馬が載っており、馬琴は戯作者としての地歩を固めるための大切な京坂旅行（享和二年）では、南畝の紹介状等を貰い各地の狂歌壇の人々を主に尋ねた。^(注18) 狂歌は戯作者としての必須技能でもあった。『春窓秘辞』の各文を見ると、正月の真顔は全文が万歳の詞章なので入らず、十月・岡持は文中に取り込んでいるものの、他の者は皆、文末に狂歌を添えている。それらの中心に、江戸に狂歌の大流行を齎した蜀山人・大田南畝の存在があり、彼に繋がる人脈の広さをまざまざと見せつけている。たとえば他と相容れぬ偏屈な性癖をいわれることの多い馬琴であっても、南畝が寛政十一年1799に開いた「和文の会」に真顔や飯盛、焉馬などと共に加わって、文人たちの知遇を得ている。この会は二年後には「狂文会」となり、馬琴も引きつづいて参加していた。すべての筆者は南畝に繋がっていた。

『春窓秘辞』が出た文化十年、京伝はもちろん、三馬も黄表紙と滑稽本の代表作を出しており、馬琴も読本において確固たる地位を既に得ていた。筆を取った戯作者たちは、少し以前の江戸文芸を代表する六十歳を超えた文人たちと充分に伍することのできる存在になっていたといえよう。では皆がそれぞれのジャンルを代表する大家が集められたかという点、やや首をかしげざるを得ない。たとえば九月・三陀羅法師は人気の狂歌師ではあっても真顔や飯盛よりも格が下がる。彼が入ったのは高齢の故であろう。たとえば十二月・桜川甚孝も唐突である。幫間として高位の者に昵懇していた甚孝が巻軸を任されたのは、序跋に見える「樵山子」「淇澳堂」すなわち本書の制作依頼者が、大名クラスの高位の武家であり、浜田氏も述べるように甚孝のパトロンであったからだろう。^(注20) そして七月・山東京山。京山は江戸末期の合巻で人気を得た戯作者であり、文化十年にはいまだ注目される作を持たない。その京山が入るのは南畝に親しい京伝の縁であろうが、美しい料紙と共に、いささかの違和感を覚えざるを得ない。

狂文に見る文人と戯作者

次いで艶本との関連で十三人を見ると、文人と戯作者との違いが明らかに出て来る。艶本を出しているのは、式亭三馬を筆頭に、絵師としても多くの筆を取った山東京伝、そして朋誠堂喜三二に桜川慈悲成と、戯作者グループに偏る特徴である。それらの制作は既にひと昔前の所行となっていたものの、彼等にとつて艶本の附文を綴ることはそれほど困難なことであったとは思われない。では文人グループにとつては如何であつたろうか。

『春窓秘辞』の戯文そのものに目を移す。本書はそれぞれの自筆板下を刻していることから、版本としては判読が難しい。けれども既に岡田氏による翻刻が出されていることから、全文紹介は避け、文人と戯作者それぞれの狂文をいくつか、若干の修正を施して載せることとする。なお読みやすいように句読点を補い、漢字は旧字体を新字体に改めたが、筆者によつて濁点表記等に違いが見られることから、これらについては各月に補記した。

まずは「正月」狂歌堂と「二月」六樹園、二人の狂歌師の戯文である。

正月 狂歌堂

徳若笑万歳

床若に五ばんせいとは、君もさかんにまします。愛敬有けるあら玉の年喰らひ娘のおしたては、器量よしの玉のかんざしかうべにさし、あやまる足袋をはいて箱せこの鼻紙を口にくはへ、御用の物を手に持て宝の君の御寝間のあたりを見てあれば、錦の夜着がご結構、綾の褥がご結構、ごけつかうなお床をさらりやさつと敷わたさせ給

ひける。御枕のもとにはみす紙が一千帖、笑本が一千巻、法華経の八の巻よりはるかぐつと有がたい具足櫃の一の巻に、人々の涎があまりだらせ給ひけり。昔の春画は堅節な図、今の枕は意気な図、これを見てやら疫神も、七里けつかい逃出すべきだんひら物を握らせ給ひけり。一本の柱は帆柱丸、二本の柱は阿蘭陀線香、三本のはしらは三臓田、四本のはしらは四ツ目の妙薬、五本の柱は牛蒡に玉子、六本の柱はうなぎの蒲焼、七本の柱はなまきずいき、八本の柱は八味丸、九本のはしらは鯨のたけり、十本の柱はおつとせい、此物どもの力をかりず、御自分の勢ひにて二百文をはねかへし、エイといふて立られけるは、誠にめでたう侍ひける。此勢ひをみろく十年たつとし、諸賢の立たる御道具なれば、日は照れども昼間もかまはず、風を引てもそれにもかまはず、一年つもつてホ、ヲ千八百番の御いきほひ、目出度所を是からそろそろグツチャラ、旦那様もお好きだがおかみ様もお好き、日本国が恵方の方からひとつによつて参るくくく何が又参る、お気がたとと参る、白酒や煉酒がだらりくと参る、て、の椀で五六はいもとろ、汁をおつこぼして、うへのほうへぬらり、したのほうへぬらり、ぬらりめいて二ツころもちはやかんべいぞ、ホ、ヤレホ、おとつさまのかのおゆづり物の、かのき、らきんの金の字がべたつくべいぞ、グツチャラコヤグツチャラコ お金蔵にお米蔵、おまたぐらの表門が百間ばかりもおつかだかつて、おつひらいて御子宝がはい、御寿命長久しつくりや、てうど百万番のおいはる

鶴太夫亀太夫をまねびてもとより此道すきやかしの

狂歌堂の翁祝申^印

二月 六樹園（原文には濁点表記なし、濁点表記を加えた）

いまはむかし、いみじくまらおほきなる男ありけり。ささらぎのはつうまの日、滝野川のあたりをゆきけるに、

しとのしたかりければ、岡なる所に狐の穴のありけるを見て、すそひきまくりてたちながら穴の中にしいれつ。その時藪垣のあひより、な、そちばかりなるうばの、杖にすがりたるが出てきて此男にいふやう、さてもおほきやかなる御まへの物かな、うばとし老て侍れどか、る御物はいまだ見侍らずといへば、此男ほこりかなるおも、ちして、さも侍らず、いとちひさく侍りといふ。うば、おのれは此ちかきあたりなる長者の御むすめのめのとて侍り。此御むすめ、いかなるすぐせにかかたはなる所おはして、およそむこの君十人ばかりにあひ給へれど、みな御こ、ろにつかづとておひだし給ひき。さるは御ぼ、の世にひろくおはせば、おほかたのまらにてはみこ、ろゆかぬけにてはべり。わぎみむこにならせ給は、ふさはしからんといへば、此男うちゑみて、おのれは午のとしにうまれて名をも馬とよび侍り。うまれとしにあえてや、重宝は尺にあまりて侍るといふ。さてはよきむこの君なり。先うばとつれだちてかしこにいたりて、さうじみのさまをも見給へといひつ、いざなひてあぜつたひをゆく。道のほど五町ばかりをへて大なる門有、門をいれば竹垣しこめたる所あり。こゝにまたせ給へといふく、うばはおくの方にいぬ。扱むこにまつほどいとひさしくて日くれぬ。竹垣を覗みれば、主のむすめとおほしくて、みめよくあてやかなるがほかげによりふしたり。女ばら四五人かたへにゐて、うちかたらふさま也。むすめよびいと大きな松茸をのむと夢みつといへば、めでたき御夢なりなどいひはやす時に、かのうば出きて、娘が耳に口さしよせて何ごとをかかたらへば、むすめむ、とわらひて竹垣の方を見おこせつ、あなたなる方に入ぬ。馬はあからめせずまもりぬけるに、まらは石のやうになりてうつし心もなく立ゐたるに、うば再出きて馬が手をとりて、しをりどより入てすのこにのぼせつ。さてひとまなる所にゐてゆきて戸をさして出でゆきぬ。うちみれば屏風引まはしてあり。やをらおしやりてみるに娘たゞ一人ふしをり。うれしくてやがてひた、れか、げてはひれば、女はぢらふけはひもせず、つといだきつきて口うちねぶりつ。まみ口つき此世の人とおおへず、手をやりてまらをさぐるに男こらへず

した、か物をづぶりとつきいれつ。女あしをくみれの上までさしあげて、もろてをせにかけてよ、となきいだす。男いらなし尻うちふりつ、ひだりやつ右こ、のつとつきたつるさま、伊豫のゆげたもこ、もとにあるこ、ちす。女、あなよやくといふ声ややくよわりゆきて、はてはいきのしたにてうつ、なきことをぞいふ。ふすまのうへはふのりをこぼしたらんごとく、そこら海となりぬ。おそ七たび八たびまきつとおもふほど、耳のもとにてこはそもなにごとぞといふ声さやかなるに、ふとこ、ろつきてかたへをみれば、友だち三四人つどひてたり。まばゆくてうつぶしに成て女をみれば、あなおもはずや、女と見しは大きな樹の横に臥たるにて、それがふしの穴にまらばさしはさみてゐたるなりけり。長者が家と見るはむくつけき枚のはやしにぞ有ける。さてはいぱりたれつる穴にすめる狐の、かくばかしつる也とおもふに、くやしさいはんかたなし。すべて夢のやうにてあとはかなく成ぬれど、ただまらのみ化されつるなごりとどめて、臍のあたりにおこりたちてぞある。友だちどもうちみて、木のふしにいれてぬきさしあららかにしつるまらの聊の疵だにつかず、そこなはれざる事こそいみじけれ。命めでたきまらなりといへば、馬うちうなづきて

よりともにあたまがちなるまらなれば　ふしぎの穴に入れどまつたし
とへらぬてにいひなしつ、玉子のたいこのおとにまぎれてあしばやに出ていにけるとぞ、かたりつたへる。

六樹園

「正月」の伝統的で格調高い言葉を用いた優雅な読み口を唱える真顔と、「二月」の平易な言葉を用いて俗の世界を自在に楽しむ飯盛の、それぞれの特徴が現れた狂文が並ぶ。真顔の「徳若笑万歳」は、「徳若に、御万歳と御代も栄えますます、愛嬌有ける新玉の」に始まる万歳の定型を用いて、その中に情交に関わる品々、強壯剤や媚薬の

名が次々と埋め込まれ、猥雑な擬音までが入るが、これらは正月の祝言を述べる万歳そのものに備わった性的に奔放な言語遊戯を推し進めており、めでたく子宝に結びつけることで、鶴太夫と亀太夫二人の生み出す闊達な祝祭の詞としている。対して飯盛は、「二月初午」から妖狐に化かされた巨根の男の滑稽譚を悠然と繰り広げる。美しい娘に化した妖狐に導かれた男が、彼女の住居で一夜の激しい歓楽を共にし、翌朝気付くと木の下にいたという話型は、たとえば『画図玉装譚』（色摺大本六冊、天保元（一八三〇）年、溪斎英泉作・画）における白面九尾の妖狐の化けた美女の怪異譚に斉しい。巻二に於ける美女お玉に導かれる金碗求馬、巻四、五の乱菊公主に呼ばれる上総介と同じ話型であり、ありふれたものといえよう。その意味ではこれも正月同様に定型の狂文であるが、悠然とした和文を楽しむ、最尾の狂歌で笑い収める達意の文章を愛でるべきなのであろう。

次に戯作者から、「四月」三馬、「八月」馬琴、「十一月」京伝を載せる。

四月 式亭三馬（振り仮名および濁点表記は原点のママ）

男莖形のなきいにしへは、伊勢肉具の名のみ高かりけん。陰戸形のなきそのかみは、筑紫陰門の味ひのみ慕ひにけむ。彼は野の宮の宮の絵巻物、袋法師の物語など、世にもてはやせしころほひなれば、真玉手の玉手さし巻とよめりしむかしくにして、抱つくと唱ふる今の代のさまとははるかにことふりたり。相模女に房州鋼とかいへる玉門の名だゝるものは、猶後の世に出きにたれど、いづこもおなじ玉莖の味ひ、いまだ何かしてふ名をさへきかず。こゝにもものせるたはれ絵のこゝろを探るに、みやこはよろずの物おのづからやはらぎたれば、殊にやハくむくくとして、名に流れたる京の水、其潤ひもさこそとおもひやられぬ。はた郭公ハきく人も恋を催すよしいふなれば、妻恋る音に心うかれて、かの所を見る人の心の内やいかならん。さが父に似てなかつとも、さが母に似て

どこやらも、卯月なかばのしのび音^ネをわれにはゆるせといふなるべし。春^カ三^ンす^ゴして夏^カ六^ハ此月よりまさり、秋^ウ一^ツむしかへしてのち、無^ム冬^ウの月令を用ゑず。食^クふて毒^{ドク}をしる時珍^カが物産家^カにあらねば、嘗^シて能^ノを^ウさ^トる神農の本草家^カにあらざ。これを唐山^{モロコシ}の王昌齡^ハ、遥^ト二望^ム玉門関^ト賦^シ、我^ワカ国の三条殿^ハはあふさか山のそれならで、京^{キョウ}のおやまのさねかつらとなんよむべかりける。おのれはそれにひきかへて、例^レのつたなきたはれうたをよめる、その歌

なげきかう京の女郎の文弥ぶし

き、にきた野のほと、ぎす程

於江戸本町小築

式亭三馬戲贊[㊦]

八月 飯台狂夫(曲亭馬琴) (原文には濁点表記なし、濁点表記を加えた)

紫微宮の玉の床、二星雲雨のこがねのまくら、いづれはあれど年もまた、三五夜中のたのしみは、さ、らえ男をみなへし、人間界にしくものなし。玉兎の白も杵なくては、搗せんとするに何もつかれず。呉剛が斧も柄をとらねば臍の下へ当られず。あづま遊びの吾妻形、みが、で清き輪の玉、細工はしなく造化の巧。つまる所はこの道ひとつ、昔もかくやもろこしの常娥、長命丸を盗て天上までもちあげ、王母も、をはだけて世界ひとつにあつまるといふ。嗚呼よい月のまん中をつくく見れば、誰も気の郁々乎たり。東籬の秋まだ蒼なるをとめ菊、これぞ葉月のはつ物ならば、玄の亦玄、玄牝の門なるべし。

嗚呼よやと下から声をからせども

晴てはさ、ぬもち月の影

飯台狂夫醉墨④

十一月 山東京伝（原文には濁点表記なし、濁点表記を加えた）

翠簾家体のおほみや人は、金屏の冬籠に霜の袴をぬぎすて、鴛鴦のふすまにつばさをならべ、田舎哥の賤がふせやは、みぞれ酒の一盃機嫌に木枯の枝をつらねて、昏子さはりのあらさをいとはず。二番目の夫婦いさかひ、みせずが、きの茶屋場はさらなり、加田の權立浮身やと、比丘尼蓮葉女伽やらふ、むしやうにのぼる張子の山のた、ずまひ、あなうましといへるふき水のめいほく、いづれか恋にあらざるべき。花道に降三角の雲のはだへのぬくめ鳥、幕がおそいとゆふ月の、待夜はつらき浮寝鳥、挑燈でつく冬至の餅、寝てあたゝまるふぐと汁、青竹から降る雨となり、うへからつるす雲となる。狂言綺語のわざをきも、三分昼夜の太夫棧敷に、たれかよたりをながざらめや。

年の内に春をむかふる顔見せは 月に正月の事はじめかも

山東京伝④

「四月」三馬は「たはれ絵のこ、紹を採る」と、まずは都の女郎が郭公を聞く図柄を想定したことを明示し、更に文末の狂歌でもその様を描いている。狂文は『小柴垣草紙』や『袋法師絵詞』といった中世の春画絵巻から説き起こして江戸の相模女などに繋げ、さらに風流な京女郎に辿り着いている。しかしその描写は、文頭と文末は振り仮名にも片仮名を用いた漢文調を用い、間は和文調を用いるものの、全体としてちぐはぐな印象を拭えない。三馬

は春画の名手である喜多川歌麿と組んで艶本の序文や附文を多く作っており、著名な作も多い。しかしながら本書では艶書らしい艶っぽい筆使いはまったく感じられず、生硬な狂文となっている。

「八月」馬琴はもちろん「中秋の名月」に因んでおり、文末の狂歌から想定される春画は、やや雲のかかった名月を眺めながらの乙女の閨の交情と思われるが、狂文は中国の月に因む故事を並べて艶本としての性的な描写をさりげなく避けている。馬琴は附文に筆を取った唯一の艶本『艶本多歌羅久良』で、上巻のみで筆を投げており、自らが性的な描写に不向きであることを自覚していたであろう。南畝への敬慕の情から引き受けたものの、他では見られない「飯台狂夫」号を用いたことから馬琴の抱いた躊躇が感じられ、『艶本多歌羅久良』の序文（署名は曲取主人）同様に中国の故事に逃げる手法を採ったと思われる。

「十一月」京伝では、「芝居の正月」で、江戸っ子たちにとっては何より待ち望まれる顔見世がとりあげられている。文末からは華やかな吉原の太夫たちが棧敷にならぶ姿を描いた画図に付けた狂文と推されるが、その実、芝居そのものを描く言辭は少ない。舞台に作られた翠簾家体から大宮人に扮した役者を出し、かれらも「いずれか恋にあらざるべき」とするが、それにしても盛り上がり欠ける。京伝は絵師・北尾政演として艶本の筆も取り、『艶本枕言葉』のように文章と画双方を担当した著名作もある。しかしながら本文では顔見世の劇場も役者たちの情交も、いきいきとした表現を逃げていられるように思われるのである。

このように艶本とは関わりを持たない文人と、職業的な作家として艶本にも筆を取る戯作者の狂文とを比べると、『春窓秘辞』においては前者の方がはるかに艶っぽい文章を鮮やかに仕上げられており、後者はそれに比してぎこちない筆致となっていることが判明する。翻刻を挙げなかった戯作者・京山も同様でその文章は三人の戯作者以上に堅苦しく不出来である。けれども、では戯作者の故を以て艶文の作りが不手際なのかというと、そうはいえないよう

である。十二月の中で最も艶本らしい文章は十月の手柄岡持こと朋誠堂喜三二のもので、恋人の人目を避けた房事から妹背の契りを親に許されるまでの長文が、情交中心に描かれている。喜三二は本書が出された年の五月に七十九歳でなくなっている。高位の武家であり、初期を代表する黄表紙作者で色里を知り尽くした通人は、高齡をもととせず、艶文に大いに遊んでいるのである。対して選ばれたメンバーの中で年若い戯作者たちは、既にその地位を不動のものに固めていたにもかかわらず、年長の文人たちの前に戸惑いかしこまらずにはいられなかったであろう。文化十年における文人と戯作者の位置はこのようなものであった。

『興佳帖』と『菊乃菜』

『春窓秘辞』刊行前年の文化九年三月、朝寝坊成丈編によって『興佳帖』という狂文や狂歌、画図を集めた帖仕立ての一冊が作られた。『春窓秘辞』より一回り小さい半紙本の大きさの写本で大東急記念文庫に所蔵され、中村幸彦氏の解説付きの影印版で見ることができ^{（注2）}る。朝寝坊成丈は神田鎌倉河岸の酒屋である豊島十右衛門の狂名である。豊島屋は馬琴の日記にもしばしばみりん酒の購入などで名前が載る、江戸名物の著名な店である。この人物が知人たちに声を掛けて書画帖を作ったもので、序文を手柄岡持が、跋文を蜀山人が付けた豪華な私家版である。集められたのは狂歌師、戯作者、浮世絵師で、狂文や狂歌は編者に因んで酒を寿ぐものが多いものの、画図は「相撲図」や狂歌入の「なまず」など、各人がさまざまな意匠で参入している。メンバーを挙げると、

六樹園（石川雅望）

きの定丸（狂歌師）

式亭三馬

馬琴

萬象（二世森羅萬象、狂歌師）

原陽亭（伝未詳）

蹄齋北馬（浮世絵師）

芍薬亭長根（狂歌師）

豊国（浮世絵師）

国貞（浮世絵師）

立川談洲樓焉馬

浅草庵（狂歌師）

十返舎一九（戯作者）

四方歌垣真顔（鹿都部真顔）

これに序文の**手柄岡持**（**朋誠堂喜三三**）、**跋文の蜀山人**（**大田南畝**）の総計十六名である。

『春窓秘辞』とは、このうち**太字**にした七名の者が重なっている。手柄岡持による序文には「世に書画帖など題して東南北西に名たる諸君にこひておもひくゝの書画を集むること近き年頃類に行はれり」とあり、この当時、高名家を集めて書画帖を作ることが流行しており、その流れに乗って朝寝坊成丈が個人的に作ったのが本書の由来と知れる。豊島屋主人の狂歌師としての地位と名高い酒屋の力が、文人と戯作者、そして浮世絵師という江戸の人氣者たちに一筆を促したものである。本書の中では、六樹園と三馬は酒に因む狂文、馬琴と談洲樓、真顔（狂歌堂）

は狂歌をと、それぞれが個性豊かな形で書き出している。ちなみに一九は大根に因む狂歌と略画を載せる。ここでは文人と戯作者、浮世絵師それぞれが自己の流儀を主張しており、戯作者達も肩身の狭いしゃちこばった文章を書く姿勢はまったく見せていない。

そして『春窓秘辞』刊行の翌文化十一年、江戸の人々の興味を大いに惹いた巢鴨名物の菊細工の一大興行が九月に行われた。これに際して、全五十二軒の出品植木屋の花壇すべてに当時高名の戯作者による狂歌を掲げることとなり、『巢鴨名産菊乃葉』（以下、『菊乃葉』と表示）と題して、菊細工の図解に狂歌を添えた細見が出された。この案内記は現存する刊本の形には未だ出逢わないが、国立国会図書館所蔵の貼り混ぜ帳『商牌雑集』二七の冒頭部に表紙を含めて十枚が貼り込まれている。^(注22) また紹介と翻刻を板坂が行っている。^(注23)

『菊乃葉』は中本一冊、国立国会図書館デジタルコレクションで全画像が公開されている。^(注24) 巻末（九丁裏）に「文化十一年甲戌菊月吉辰／馬喰町二丁目 版元 地本問屋 森屋治兵衛／巢鴨町 賣弘所 勘太郎」とあり、菊細工の会場で売り広められたことが分かる。

内容を見ていくと、表紙は下部に菊慈童、左上部に胡蝶が描かれ、紅・薄茶・黄色の彩色摺。記載は、

すかも
巢鴨／名産 菊乃葉

歌川美丸画

数品／作菊／狂歌／発句／泳者

山東京伝[㊦]／式亭三馬[㊦]／山東京山[㊦]／十返舎一九[㊦]／曲亭馬琴[㊦]

立川談洲楼／七十二翁 焉馬[㊦]

見返しから一丁表にかけては巢鴨の菊細工の案内図で、全五二軒の植木屋の位置が示され、一丁裏から九丁表まで美丸による菊細工の画の中に出品作名と植木屋、狂歌が書かれている。

表紙によると焉馬中心の企画で、南畝に比べて戯作者寄りの大立者である立川焉馬が当代の人気戯作者に声を掛け、出品された五十二個の菊細工に因む狂歌五十二首を飾り、そのガイドブックを人々に売り広めたものである。

表紙に見えるのは、京伝、三馬、京山、一九、馬琴の五名。一九を除いて、前年に作られた『春窓秘辞』と重なる顔ぶれとなっている。

詠者毎の作製狂歌を『菊乃栞』に並べられた順に番号を付して見ると、

山東京伝… 1、2、3、4、5、6 ……計六首

式亭三馬… 7、8、9、10、11、12、13、14 ……計八首

山東京山… 15、16、17、18、19、20、21、22 ……計八首

市川三升… 23、24、25 ……計三首

立川焉馬… 26、27、28、29、30、31、32、33、34、41、42、43 ……計十二首

徳亭三孝… 35、36、37、38、39、40 ……計六首

時雨庵… 44、45、46 ……計三首

曲亭馬琴… 47、48、49、50、51、52 ……計六首

一九は表紙に名前が載るのみで、狂歌は入っていない。一九の代わりに市川三升、徳亭三孝、時雨庵の三人が入るが、三升は『春窓秘辞』でも述べたように、焉馬が後援者であった七代目市川団十郎その人である。江戸一の人気役者の三首を中央に置くことで、菊細工の興行を更に盛り立てようとしたのであろう。三孝は、三馬を囲んで弟子

たちが並んで祝う口絵を付けた処女作『書習廓文章』（合巻）を二年前に出したばかりの三馬の門人で、時雨庵は六樹園門下の狂歌師の初代絵馬屋額輔である。三馬はその号を唐来参和と烏亭焉馬から取っており、焉馬との縁は深い。焉馬の呼び掛けに三馬も尽力して集めたメンバーであろう。ここでは明らかに江戸っ子に人気の戯作者に焦点を当てて詠み手が集められており、菊細工に集う多くの巷間の人々の興味が彼等に向いていることが伺える。狂歌の並びを見るに、当初は三孝の後に41〜46の計六首を一九が担当する予定だったのでなかろうか。

ふたたび『春窓秘辞』

『春窓秘辞』と『興佳帖』『菊乃栞』は、この頃の著名人の狂歌や狂文を好む風潮を受けて、多くの詠者が重なって参加している。その中で『春窓秘辞』は知識人好みの粒選りの選択が伺えるが、この人選で気に成るのは一九の不参加である。

文化十年の十返舎一九を、他の『春窓秘辞』詠者と同様に紹介しておく。

十返舎一九

四十九歳、天保二年1831没、享年六十七歳

戯作者であるが、絵師として絵筆も取り板下も自ら作る器用さで、数多くの作を出す。黄表紙にもそれなりの当たり作を持つが、何といっても享和二年から刊行が続いた滑稽本『東海道中膝栗毛』（初編は『浮世道中膝栗毛』、八編は文化六年刊）の成功で地歩を固め、文化末期には金比羅や中山道などを巡るその続編を刊行中である。

艶本の作も多く、「陽発山人」始めいくつかの隠号を持ち、画・作のものもある。

- ・『笑本艶次郎』 墨摺半紙本一冊、寛政十年、陰蘭堂主人（十返舎一九）作・画
 - ・『繪本江戸錦』 墨摺半紙本一冊、寛政十一年頃、陽発山人（十返舎一九）作・画
 - ・『玉門の五常』（仮題） 色摺横小本一冊、寛政十一年、陽発山人作・画
 - ・『画本帆柱丸』 色摺横小本一冊、享和元年、陽発作、喜多川歌麿画
 - ・『艶本葉男婦舞喜』 色摺半紙本三冊、享和二年、道楽人（十返舎一九）作、喜多川歌麿画
- さらに幕末まで大いに売れた『文のはやし』系の艶書往来の最初の作である『文しなん』（墨摺中本一冊、文政中期頃、磨丸（歌川国丸）画）の作者でもある。^{注26}

『春窓秘辞』に採られた他の戯作者同様、既に人気と地歩を固めた著名の人物であり、一九の不在は不審を持たれよう。浜田義一郎氏はこのことについて、「文人気取りに縁のない庶民に徹した一九」は「無くてもふしぎはな^{注27}い」としたが、『興佳帖』には入り、『菊乃栞』表紙にも名が載ることに鑑みると、一九の側に別の原因があったのではなからうか。中山尚夫氏の「十返舎一九年譜稿^{注28}」を参照すると、文化末期には『木曾統藤栗毛』（滑稽本）の刊行が続いており、十年からは『方言金草鞋』^{注29}が出され始めている。どちらも長く続く一九の人気作であるが、その取材旅行の為に長旅に出る事が多い。たとえば文化九年には六月から中山道と木曾街道を通ってはるばると大坂まで取材旅行に出ており、文化十年には播州・四国・九州に、『菊乃栞』が出された翌十一年は七月から十月に、信州・越後・会津に向いている。^{注29}一九の江戸不在の故を以て、『菊乃栞』表紙では名前が記載されていた彼の狂歌を載せることができなかつたのであろう。そして『春窓秘辞』も、当初は一九の参加が求められていたのではないだろうか。以下は推測であるが、『春窓秘辞』の京山の一面は、一九に用意されたものだったのでなからうか。京山の狂文を載せた料紙は、下方に松葉と松毬を二色摺した華やかなものであるが、この意匠は京山の狂文との関

わりを持たない。一九の判は柄の途中に丸に「貞」字を入れた熊手である。この熊手から松葉と松毬を導いたのではないかと妄想する。

文化九年『興佳帖』、文化十年『春窓秘辞』、そして文化十一年の『菊乃葉』と並べると、この間に見られる江戸文化の変容が浮かび上がる。『春窓秘辞』は、『興佳帖』序文にある江戸の著名人たちの書画を集めて個人的な書画帖を作る流行に乗じて、考案されたものである。そこに「春画」なき「艶本」という風雅なひねりの効いた趣向を考案したのは南畝の嗜好であろう。江戸人たちが敬仰する南畝が呼び集めたのは、知識人としての面を持つ文人寄りの数寄人たちであり、その中では大衆的な人気を集める戯作者は自らの筆を押さえている。けれども、文化末期の町の好みは既に現代文化に通じる気楽な愉しみ、戯作者たちが生み出す笑いや怒り、涙に溢れた波瀾万丈の軽い小説類に移っていた。『菊乃葉』では、江戸一番の人気役者に並んで戯作者たちが人々の興奮を盛り上げる役割を担うのである。

『春窓秘辞』の各筆者の没年を思い浮かべると、既に浜田氏が指摘しているが、十月・手柄岡持はこの年に、翌年には九月・三陀羅が亡くなり、三年後には京伝が、十年後までには半数以上の者が世を去っている。江戸中期の明和から天明期に江戸に沸き起こった鮮烈な都市文化を支えた知的な言語遊戯の文化の主軸が、相次いで去っていったのである。その後は職業的な文筆家たちの時代、戯作者が企むさまざまな空想世界を楽しむ言語空間の時代となる。『菊乃葉』には、町行く人々が菊細工に添えられた慣れ親しんだ戯作者たちの詠む単純な狂歌を眺めていく、爛熟期を迎えた江戸の庶民のにぎわいが感じられる。南畝序の『春窓秘辞』は、知識に遊ぶ江戸中期の文化の終焉を飾る風雅の作物だったといえよう。

- 注 注1 浜田義一郎『大田南畝』（吉川弘文館 人物叢書、一九八六年）、171頁。
- 注2 現在は九州大学附属図書館「雅俗文庫」所蔵。
- 注3 中野三敏『和本の海へ 豊饒の江戸文化』（角川選書436、二〇〇九年）、193頁。
- 注4 「春窓秘辞」（国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100271018/viewer/1>（最終閲覧日二〇二二年一月三〇日）
 他に東京都立中央図書館加賀文庫蔵本は、若草色の原表紙を持ち、序文、本文、跋文は中野氏蔵本に同じ。立命館大学 ARC
 林コレクションの一本（林美一氏旧蔵）は端本で、本文の順序も異なっている。
- 注5 「江戸の文華―戯作と浮世絵」展（専修大学図書館／川崎・砂子の里資料館合同企画、アートガーデンかわさき、二〇一〇年十月）
- 注6 版元は井上隆明「喜三三」著述一覽」（「喜三三戯作本の研究」三樹書房、一九八三年、18頁）によると「伏見屋善六」とあるが、出典未詳。
- 注7 浜田桐舎（義一郎）「春窓秘辞」解説」（『近世庶民文化』第十一、十二、十四、十五、十六、十七号、一九五二年二月〜五年七月）
- 注8 岡田甫『真情春雨衣』（貴重文献保存会、美和書院（紅鶴版）、一九五三年）
- 注9 浜田義一郎「春窓秘辞」（『国文学解釈と鑑賞』第三百九十二号「統秘められた文学」、至文堂、一九六七年四月）
- 注10 「紅鶴版」については、ウェブ「XX文学の館」に詳述されている。
<http://www.kanwa.jp/xbungaku/Hakim/Miwa/Miwa.htm>（最終閲覧日二〇二二年一月三〇日）
- 注11 各作者の年齢は既に浜田氏の「春窓秘辞」（注9）に載るが、若干の修正を施して記す。
- 注12 林美一『江戸艶本大事典』（『江戸艶本集成』総目録、河出書房新社、二〇一四年）、白倉敬彦『絵入春画艶本目録』（平凡社、二〇〇七年）
- 注13 石上阿希「山東京伝艶本・春画目録稿」（『文学』第17巻・第4号、岩波書店、二〇一六年七月／八月）
- 注14 浜田義一郎「春窓秘辞」（注9）、111頁。
- 注15 中山右尚「桜川慈悲成」（『日本古典文学大辞典』第三卷、岩波書店、一九八四年）、48頁。

- 注16 林美一「西早齋の隠号と大田南畝の謎 上、中、下」（『江戸春秋』2号、3号、12号、未刊江戸文学刊行会 林美一、一九七六年十二月、七七年六月、八一年四月）
- 注17 小林ふみ子、Was Ōta Nampo Seisōsai, the author of shunga books?」（口頭発表）（ロンドン大学 SOAS におけるシンポジウム Shunga in its Social and Cultural Context、二〇一〇年九月）
- 注18 三馬と「狂歌艦」については吉丸雄哉「三馬と狂歌——「狂歌艦」を軸に——」（『式亭三馬とその周辺』（新典社研究叢書213、二〇一一年）を参照されたい。
- 注19 浜田啓介「『羈旅漫録』の旅における狂歌壇的背景について」（『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年）
- 注20 浜田義一郎「春窓秘辞」（注9）、11頁
- 注21 「興佳帖」（中村幸彦編『大東急記念文庫善本叢刊 第八卷 近世自筆稿本集』、汲古書院、一九七七年）
- 注22 『商牌雑集』第二七冊の「菊乃菜」は九丁裏に刊記が付くが、その他に後表紙が付いたかは不明。
- 注23 板坂則子『菓鴨菊乃菜』（森川昭編『近世文学論輯』所収、和泉書院 研究叢書一三三、一九九三年）に本書の全翻刻を掲載。
- 注24 大久保葩編『商牌雑集』、国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2609989>（最終閲覧日二〇二二年二月七日）
- 注25 「みつからい、ふ吾は唐来子の才を慕ひ且烏亭子に忘形の友とせられしより三和焉馬の一字を取りて三馬と号するとぞ」（『式亭三馬』の項、木村三四吾編『近世物之本江戸作者部類』、八木書店、一九八八年）、47頁。
- 注26 艶書往来については、板坂則子の「二九『文しなん』と陽起山人『文のはやし』（『専修国文』97号、専修大学日本語日本文学化学会、二〇一五年九月）および『艶書往来「文のはやし」考』（『近世文芸 研究と評論』90号、近世文芸研究と評論の会、二〇一六年六月）を参照されたい。
- 注27 同注9、102頁。
- 注28 中山尚夫「十返舎一九年譜稿」（『十返舎一九研究』、おうふう、二〇〇二年）
- 注29 同注28、175～202頁。
- 注30 同注9、112頁。

付記

御教示を受けた小林ふみ子様、書誌研究を助力くださった東京都立中央図書館特別文庫室、立命館アート・リサーチセンターに御礼申し上げます。艷本資料について様々にご教授いただいております早川聞多先生に、心より感謝申し上げます。

コロナ禍に拠る緊急事態の下、専修大学図書館には所蔵戯作類の閲覧に便宜を図って戴き、厚く御礼申し上げます。更に『春窓秘辞』の画像使用を御許可くださり感謝します。

なお本稿は二〇一九年度専修大学日本語日本文学文化学会個人研究助成「上方の戯作と春本からの発信」の成果の一部です。

(二〇二二年四月記)